

NEWSLETTER

TOPICS

- 1 「ジェンダード・イノベーション研究助成」を新たに創設 2026年度採択者決定
- 2 2026年度「女性研究者研究促進制度」採択者決定
- 3 公開講座「モノづくりチャレンジ～3Dプリンターでオリジナルグッズを作ろう!～」開催
- 4 ダイバーシティ推進シンポジウム「共に創る未来へ」
- 5 オープンキャンパスにて女子学生向け座談会開催
- 6 第12期女性技術者リーダー養成塾開講
- 7 名古屋工業大学 男女共同参画週間

COLUMN

電気・機械工学科 准教授 牛島達夫さんの読書案内
「他者を感じる『やさしいヒト』へ」第6回

CONTENTS

TOPIC 1

「ジェンダード・イノベーション研究助成」を新たに創設
2026年度採択者決定

科学技術及び社会の発展に資する新たな知見の創出を目的として、性差分析の導入や既存研究の性別バイアスは正への取組みを支援する「ジェンダード・イノベーション研究助成」を名古屋工業大学女性活躍支援基金のもと、2026年度に新たに創設しました。5月に学内公募が行われ、選考委員会による審査を経て2名が採択されました。

氏 名	所 属	職 位	研究課題
櫻井 祐子	情報工学	教授	生成 AI によるアニメ風画像におけるジェンダーバイアスの分析
太田 匡洋	基礎類	准教授	工学知のジェンダード・イノベーションーフェミニスト科学哲学に基づく工学観・工学倫理・技術者教育の再設計

TOPIC 2

2026年度「女性研究者研究促進制度」採択者決定

受託研究や民間企業との共同研究等につながる外部資金獲得に向けた支援として、2017年度に「女性研究者研究促進制度」を創設し、女性研究者を対象に研究費助成をしています。2026年度は5月に学内公募が行われ、選考委員会による審査を経て5名の女性研究者が採択されました。

氏 名	所 属	職 位	研究課題
押村 美幸	生命・応用化学	准教授	アミノ酸の相互作用を活用した生体模倣ポリマーの創製と評価
菊池 春花	基礎類	助教	幼児向け遊び的英語活動における発話単位での教育実践モデルの提案
LETTIERI Annarosa	社会工学	助教	Experimental characterization of an X-braced panel equipped with innovative dampers
吉住 玲	生命・応用化学	研究員	共同利用・共同研究システム形成事業～学際領域展開ハブ形成プログラム～(量子ー古典生命インターフェース研究コンソーシアム)
KRAFT Viktoria	博士グローバルアカデミー	特任教員	Ferroelectric and optical properties of high temperature annealed Sn-doped BaTiO3

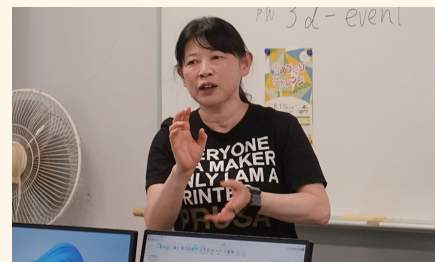
TOPIC 3

公開講座「モノづくりチャレンジ
～ 3Dプリンターでオリジナルグッズを作ろう!～」開催

2026年8月1日(土)、11号館2階CAD室にて、女子中高生を対象とした「モノづくりチャレンジ:3Dプリンターでオリジナルグッズを作ろう!」を開催しました。今回で9回目となる本講座では、アンリツ株式会社 理事・CTO 野田華子氏(本学OG)を講師に迎え、本学の女子学生4名がサポートを務める中、中学1年生から高校2年生までの18名が、3Dプリンターを活用したものづくりを体験しました。

はじめに野田氏による講義でCPS(サイバーフィジカルシステム)や3Dプリンターの歴史・仕組みについて学んだ後、3D CADの基本操作を習得。最後は、事前に考えたデッサンをもとにオリジナルグッズの設計に取り組みました。受講生たちは紙に書いたものを立体的なデータに作り替える作業に苦戦しつつも、講師や学生サポーターに質問しながら作業を進め、最終的には全員が思い描いた作品の設計を完成させることができました。

イベント終了後のアンケートでは、「これまで3Dプリンターに触れる機会はなかったので、今回のイベントに参加できて良かったです」、「操作方法や設計のやり方をととても分かりやすく教えてもらい、工学に興味がわきました。」といった感想が寄せられ、ものづくりへの関心を深める機会となりました。



TOPIC 4

ダイバーシティ推進シンポジウム「共に創る未来へ」



2026年9月16日(水)、オンラインにて、名古屋工業大学ダイバーシティ推進シンポジウム「共に創る未来へ」を開催しました。

本シンポジウムは、工学分野におけるダイバーシティの重要性と、まだ十分に浸透していない視点を共有し、今後の課題について考えることを目的としており、ダイバーシティ推進委員会委員をはじめ、教職員や学生など、学内外から61名が参加しました。

開会にあたり、小畑誠学長が挨拶を行い、ダイバーシティ推進センター加野准教授が本学におけるダイバーシティ推進事業の取組内容について報告しました。

続いて行われた講演では、お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科教授 伊藤貴之氏を講師に迎え、「情報可視化が見せるダイバーシティの課題」と題してお話いただきました。

講演は、データサイエンスと情報可視化の基礎的な考え方の解説から始まり、続いて、AIが持つ無意識のバイアスについて具体例を交えた説明がありました。後半では、空調の温度差や大学進学率の地域差など、「性差が細部に宿る」事例が取り上げられ、科学技術の設計・評価にジェンダー視点を取り入れる重要性が示されました。最後に、本学副学長・ダイバーシティ推進センター長 吉田江依子教授より、講演者、参加者への謝辞が述べられ、シンポジウムは閉会しました。

参加者からは、「情報が可視化されることで、これまで認識できていなかった状況や課題が明確になることを理解できました」「AIの動作は人間が鍵を握るからこそ人材多様性の確保が必要といったお話が特に興味深く感じました。」といった感想が寄せられました。



TOPIC 5

オープンキャンパスにて女子学生向け座談会開催

2026年6月6日(土)、7月31日(金)のオープンキャンパスにて、女子学生向け座談会を開催しました。女子学生団体彩綾～SAYA～のメンバーを中心とした名工大在学中の女子学生が学科ごと8つのグループに分かれ、来場した高校生からの質問に丁寧に答えました。

現役の学生からリアルな大学生活について聞ける貴重な機会に、参加した高校生は、学科選択の理由や受験勉強の進め方、入試制度やサークル活動について、積極的に質問を行い、真剣な表情で話を聞いていました。

会場は終始にぎやかな雰囲気です。参加者からは「緊張しすぎず、気になることを聞けました。より具体的な大学生活を想像することができ、受験も頑張りたいと思うようになりました」、「受験の話から大学生活の話まで幅広く聞くことができ、勉強のモチベーションが上がりました」といった感想が寄せられました。



TOPIC 6

第12期女性技術者リーダー養成塾 開講

製造業に勤めている女性技術者を対象に、技術者として長く活躍するために必要なスキルを学び、長期的視点でキャリアをデザインする機会を提供する「女性技術者リーダー養成塾」が開講しました。第12期となる今年度は、20社から21名の女性技術者が参加し、9月3日(木)に入塾式・第1回講座、9月15日(火)に第2回講座が開催されました。

第1回講座は、午前に鬼木利瑛氏によるキャリアデザイン講座が行われ、自己分析や自己理解ワークを通して自身のキャリアビジョンを整理しました。午後は西岡慶子塾長による「VUCA(答えがない)時代」をテーマとした講義が行われ、AIと協働する中で必要な技術者の役割について話し合いました。受講生は自己分析やグループディスカッションを通じて、自身の価値観やこれからの時代に求められる力について理解を深めました。

第2回講座では、午前に北村憲彦氏による「プロジェクト・マネジメント」、午後に松岡洋佑氏による「リーダーシップ」に関する講義が行われました。どちらもグループでのディスカッションを中心とした内容であり、受講生たちは互いの意見を引き出しながら活発に議論を行い、2つの講義を通じて「協働」の重要性を実感していました。



TOPIC 7

名古屋工業大学 男女共同参画週間

毎年6月23日から6月29日は、
内閣府が定める「男女共同参画週間」です。

これに合わせて、ダイバーシティ推進センターでは、本学における男女共同参画の理解促進を図るため、図書館にて「名古屋工業大学男女共同参画週間」の企画展示を開催しました。ポスター掲示のほか、ロールモデル集やジェンダー・ダイバーシティ関連図書、i-café(11号館3階)蔵書リストなどを設置し、図書館に立ち寄った学生や教職員が男女共同参画について気軽に学べる環境を整えました。

なお、i-caféにある蔵書は、センター事務室(11号館2階)に学生証または職員証をお持ちいただければいつでも貸出可能です。牛島先生の読書案内で紹介された本も揃えていますので、ぜひご利用ください。



電気・機械工学科 准教授
牛島達夫さんの

読書案内

他者を感じる「やさしいヒト」へ

第6回

今回紹介する本は、南川文里著「アフーマティブ・アクション」(中公新書)です。2023年、合衆国連邦最高裁はアフーマティブ・アクション(積極的差別是正措置、以下AA)を違憲とする判決を出しました。本書には、1960年代の公民権運動からこの判決までのAAによる差別解消の試行錯誤の歴史がまとめられています。

AAの一つである大学入試の女子枠には批判もありますが、本学で約30年間実施してきた女子推薦入試の成績追跡調査では、入試形態による入学後の成績に有意な差はありません。女子枠がスティグマを生むとし、その導入を否定する言説は、男女不平等な社会構造を所与のものとし、女子枠で入学した学生に対する差別的な見方を広めることで、むしろスティグマを再生産・強化することを危惧します。

女子枠にはメリットがあります。一定の数の女子学生が確保されていることで、同じ学科で同性の友人ができる可能性が安心感につながり、女子の一般入試受験を促進します。代替策として挙げられる、小中高の児童・生徒やその教員や保護者へのアウトリーチは女子枠と対立するものではなく、並行して進めればよいのです。女子学生ひいては女性研究者が増え、様々な個性・人格を持つ女性と関わることで、男子学生・研究者も気づき学ぶ機会を得、新たなジェンダード・イノベーションにもつながります。

合衆国では1964年に公民権法という包括的な差別禁止法ができましたが、それで直ちに、人種・性別の平等が実現されたわけではなく、半世紀にわたるAAの試行錯誤があったのです。日本国憲法も、法の下での平等(14条)と両性の平等(24条2項)を謳っていますが、社会的不平等は今なお残り、相当する差別禁止法也没有。本書では日本を「AAのスタートラインにすら立っていない」と評しています。合衆国では、違憲判決後も、マイノリティがなお不平等な競争を強いられているとして、AAの必要性が訴えられています。平等実現の制度や取組の経験が乏しい日本で女子枠を批判することは、合衆国での長い経験と模索を経ずに、AAへの反発と後退の局面だけを先取りすることにならないでしょうか。

与謝野晶子は「髪五尺 ときなば水に やはらかき 少女ごころは 秘めて放たじ」と詠んでいます。「髪五尺」という定量的表現に、理系のセンスが感じられます。女性が自由に表現することが憚られたこの時代において、どれほどの女性の理数の能力もまた、秘められたままだったのだろうかと思像します。



南川文里 著
中央公論新社
(2024年7月22日)、256頁